

平成23年度 武蔵野市協働推進事業
協働推進のための市民学習会

検証レポート

大震災！その時市民は…？



武蔵野市企画政策室市民協働推進課
NPO 法人 武蔵野市市民活動・NPO ネットワーク
地域福祉懇談会

はじめに

地域福祉懇談会

安藤 頌子

皆

さま、本日はお忙しい中をご参加頂き、どうも有り難うございます。邑上市長をはじめ、沢山の方において頂いて、今日はぜひ有意義な会にしたいと思っております。

自

己紹介が遅れました。私は、地域福祉懇談会の安藤と申します。

地域福祉懇談会は6年前から、月例会で地域福祉に関わる情報交換・研修・意見交換などを続けてきた市民グループです。

3月の定例会はキャンセルになりましたが、4月の定例会で改めて災害時の情報交換をしたところ、市内各地で色々な動きがあったという話が出てまいりました。そして、話を聞くほどに、震災直後の混乱した状況の中で、市民、行政、町の中の専門家などが、それぞれの立ち位置で感じたり、考えたり、判断したり、受け止めたりしながら、懸命に動いたことが如実にわかってまいりました。

そこには普段私たちが言ってきた「支えあいのまちづくり」の具体化がありました。自前で考え、相談し、行動する市民の自治の力がありました。全市ではもつといろいろな動きや気付きがあったことだと思います。

全体で検証し、次に活かすきっかけになればという思いで、もうその時から企画いたしますと、市報などの告知も間に合い

ませんでしたけれども、ともかく拙速を恐れずに、緊急のレポートとさせていただきます。

今

回、この企画の実施にあたっては、武蔵野市NPO・市民活動ネットワークや市民協働推進課とご一緒に準備を進め、協働推進のための市民学習会という形で実現しました。その過程では大きなサポートもあり、また難しい経験もいたしましたが、このことも、改めて今後活かしていきたいと思っています。

私

私たちは今後、被災地に対する息の長い救援活動に取り組んで行くとともに、子や孫、顔も見えない今から生まれる子供たちのことにも心を寄せながら、放射能やエネルギーの問題に、目をそらさず向き合って行かなければなりません。そして、今日という日々を大切にし、人には優しく、暮らしの足元をしっかりと固めて行かなければなりません。

近未来に必ず来ると言われている直下型地震にも備えて、今回の色々な体験や気付きを、この町の防災やまちづくり、人のつながり、ご近所関係などに活かして行くことが重要です。ぜひ街ぐるみで多くの知恵を集めて、今後にしっかりと反映させて行きたいと思っています。

3月11日、突然の大地震に対して、武蔵野の市民は、そして行政は、何が出来たのか、または何が出来なかったのか？出来たのはなぜなのか？レポーターの皆さんのご体験やご意見をうかがって、今後活かせればと思っています。

どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。



大震災！その時市民は…？



平成23年5月27日
武蔵野市役所601会議室

【報告者】

南町では……吉岡諒子さん（南町福祉の会）

小餅友子さん（南町コミュニティ協議会）

本町では……山崎フミ子さん（吉西福祉の会）

中村三重子さん（吉西福祉の会）

東町では……原利子さん（東部福祉の会）

災害弱者は…岩崎みどりさん（むさしの未来まちづくりたい）

行政では……笹井肇さん（防災安全全部部長）

三澤和宏さん（健康福祉部部長）

【当日の進行】

市民6名と武蔵野市職員2名の合計8名の方に
レポートをお願いした。

一巡目として、各15分程度のお話を頂いた後、
再び先頭の方に戻り、補足として各5分程度、
二巡目のお話を頂いた。

その後、15分程度質疑の時間を設け、会場との
コミュニケーションを深めた。



南町では…

南町福祉の会

吉岡 諒子さん

皆

さまこんにちは。「南町福祉の会」に所属しております吉岡です。

南町ではこの「福祉の会」や南町コミセン、それから特別養護老人ホームと在宅介護支援センターが一緒になった「ゆとりえ」という施設がありまして、そういったところが日常的に連携をとりあって、地域での課題に取り組んでいます。

そういう地域での連携やつながりといったものが出来てきたかなと感じていた所に、この3月11日の東日本大震災という事態が起きました。

その時、じゃあ私たちは一体どういう動きが出来たのか、どんなことを感じたのかということをお話させて頂きます。

こ

の大震災が起きた時、私自身は外におりまして、ちょうど知り合いの奥さんと立ち話をしていました。そうしたら突然揺れが来まして、20メートルぐらい先でブロック塀が倒れたんですね。一瞬何が起きたかわからなくてパニック状態になりましたが、少し落ち着いてから様子を確認しに近づいてみると、40年近く経った古い大谷石の塀で、本当にみごとに綺麗に倒れていました。

幸い怪我人等はありませんでしたが、今後、「ブロック塀は危ないですよ」って言うだけではなくて、具体的な対策に取り組んでいかなければいけないね、というようなことを集まった人同士で話したりしました。

そ

の後、帰宅しましたら、私の家の周りでも皆さん外に出ているので、普段お顔を合わせたことがないような方も含めて、「怖かったですね」っていうことで、自然とコミュニケーションが生まれていました。

近くに空き地がございましたので、今度なんかあったらここへ集まろうとか、もしその場所に来ない人がいたら、みんなで安否確認をしようとか、自然発生的に近所の人たちが集まって、今後の話し合いをしているような感じになっていました。

そ

んな中で、私はご近所の一人暮らしの方のことが気になりました。何軒かお尋ねしてみることになりました。

重度の方は在宅介護支援センターや民生委員さんが安否確認にまわられるので、大丈夫だろうと思っただけですが、そういうサービスを受けていない一人暮らしのお年寄りの方のことが気がかりだったんですね。

結果的には、ほとんどの方は大丈夫だったんですが、でも簗が倒れたとか、ガラス戸棚の物が落ちたとか、やっぱり少しの被害は報告されました。

意外とお留守の方も多くて、そういう場合はそのへんの紙にマジックで「大丈夫ですか？ 吉岡」とだけ書いてポストへ入れてきました。

中でも一軒、特に気になるお宅がありまして、認知症のご家族がいらつしやるお宅なんですけれども、訪問してみると真っ暗で普段と様子が違うんです。何回かピンポン押しても応答がない。すごく気になりながらもどうすることもできずに時間が過ぎて行きました。

そ

うこうするうちに夜になりました、その頃には固定電話も携帯も全然通じなくなっていました。

ふと井の頭通りを見ると、すごい車の渋滞と、人の行列なんですね。「えっ、これ何なの？」って本当にびっくりして、南町コミセンへ行ってみますと、電車が止まって、帰宅困難になっちゃった方々の列だと言うことが分かりました。

で、普段私たちは福祉の会とコミセンの協働で、学童のお子さんたちの放課後の見守り活動をしているんですが、その子どもたちのお母さんたちもお迎えにこれない状況になっていたんですね。で、「どうしよう？コミセンで泊めていいかな？」っていうことになって。

始めはそんなに深刻な事態だと思っていなかったんで、窓口の方も「そんなの泊められないよ」って言っていたんですが、だんだんテレビなどで情報が入ってくると、そんなこと言っていられない状況だという認識が変わって行きました。

そんな所に、コミセンの役員でいらつしやる小餅さんも「これはそのままにしておけないね」って言って来て下さって。

歩

いて帰宅されてる方に対しても、とりあえずコミセンで出来ることとして、トイレとお水と、それから赤電話は

通じますので、これを提供しようということで、道路からよく見えるように案内の看板を出しました。

そうしたら本当に大勢の方がいらして。でもパニックになるようなことはなくて、皆さん「貸してください」とか、「助かりました」とか、中には目黒から歩いてきて「これから国分寺まで帰ります」という方とか。いろんな方が「ここでほっとできます」とおっしゃって一息ついていかれました。

それから、ベビーカーを押している若いお母さんがいて、お手洗いやなにか済ませた後、タクシーに乗ってらした若い方が交代して下さることになったと言って、すごく嬉しそうに出てらしたので、「ああ、こういう時、本当に知らない人同士でも助け合いが出来るんだな」と非常に感心いたしました。

私

自身は、どうしても先程の認知症のご家庭が気になりましたので、夜の10時ごろにはコミセンから帰りました。

そうしたら12時前に電話がありまして、お話をお聞きしたら認知症のご主人が地震ですごく興奮しちゃって、ご自分の娘さんとか孫のことがとっても気がかりで、暴れだしちゃったものから、電気を真っ暗にして、もうベッドに入っちゃったものということだったんです。私が「起こしちゃってごめんなさい」とお詫びしたら、「本当に気にして頂いてありがとうございます」ということで反対にお礼を言われました。

その後、私と入れ替わりに主人がコミセンの方に様子を見に行つて、結局深夜の2時半ぐらいに帰ってきました。そんな感じで、混乱した中でも、自然と助け合いの動きが生まれて、町の中がつながっているのを感じた1日でした。

小餅 友子さん

同じく南町の小餅です。

まず地震が起きた時のお話をすると、地震の瞬間には、吉祥寺の商工会館にあるむさしのFMのスタジオの方におりました。私は「むさしのFM市民の会」という会に関わっておりまして、毎週金曜日はその「市民の会」がコーディネートしている番組があるんですね。で、放送が終わって、1階の外に見える所にいましたら、突然すごい揺れが来て、その日のゲストの方たちと一緒に、不安な思いで揺れが収まるのをまっておりました。

揺れが収まった後は、コミセンで会議の予定がありましたので、歩いて南町へ帰りました。吉祥寺駅前も通りましたが、この時点ではまだ駅前に人が溢れているというような状況ではありませんでした。

□ ミセンでの会議のあと、夕方6時過ぎにコミセンを出ましたら、井の頭通り沿いを人がたくさん歩いているのに遭遇しました。その時に、一旦コミセンに帰って「水・電話・トイレあります」と書くかとも思ったんですけども、まだ明るかったですし、夜の会議でまたコミセンに来ることになっていましたので、そのままにして家に帰りました。

で、また7時の会議に合わせて来ましたが、そんな状況です

ので会議は中止ということになりました、一方外はもう暗くなっているのに、まだまだ人の列は途切れそうにないような様子でした。

そこで、これはもう看板を出すしかない判断をいたしました、井の頭通り沿いの良く見えるところに案内を出しました。すると、どんどん人が入っていらっしやいまして、皆さんわりと若い方が多かったかと思うんですが、やはり携帯電話が通じないので、コミセンのピンク電話をお使いになって、ご連絡の取れなかった家族に連絡をさせていただきました。

皆さん銀座とか東京駅、近くは渋谷という方もいましたが、歩いて帰ってきて疲れているので、とりあえず休ませてもらいたいということで、一息入れながら、あるいは電話の順番を待ちながら、コミセンのテレビを食い入るようにご覧になっていました。

この日は金曜日だったので、基本的には皆さんやはりお家へ帰りたいということで、少し休んでは出て行かれるという感じでした。近くで言えば中町とか西久保、遠くでは日野とか国分寺、国立の方に帰るといの方もいらっしやいました。1組だけ、逆方向の東の方、足立区の方に向かうという3人連れの女性もいました。駅でタクシーを待っていたそうですけれども、いくら待っても来ないから、少しづつ東の方に歩いてきたということでした。

そんな中に、静岡から出張に来て、武蔵野市に着いた途端に地震にあわれたという方がいらっしやいまして、会社に着いたらもう会議はありませんから帰って下さいって言われたという

んですね。でも電車は動いてないし、「僕はどうすればいいんでしょう」ということで、「何とか泊めてください」みたいな感じでした。

まあ泊まるということについては、はつきり「いいですよ」とは申し上げなかったんですが、どうぞ動けるようになるまではいらしてくださいということ、いて頂きました。

それから若いご夫婦で、これから家に帰ってもどちらにしろ2人なので、ここできればらく様子を見たいという方たちがいらして、その方たちもコミセンで一晩過ごされました。

南

町では、福祉の会や青少協との共催で「南町防災ネットワーク」という会を立ち上げておりまして、おかげさまで役所から立派な倉庫も頂いていたりしましたので、その中から毛布とか必要なものを出してきて、対応しました。

結局11時ぐらいまで人数をカウントしていたんですが、最終的におおよそ80名ぐらいの方がいらっしゃいました。

そ

んな感じで、こういう風にしなきゃいけないと決まっていたわけではないんですが、普段から防災のことをやっていたので、ある程度対応が出来たかなと思っています。

よく「練習は本番のように、本番は練習のように」と言いますけれども、私たちもやっぱり普段は防災の会議じゃなくて、一生懸命色んな訓練をして、いざ実際にことが起こった時は、みんなで集まって話し合いをして、情報の提供をし合ったり、共有をしゃあっていかなくないかなっていうことに気づかされました。



本町では…

吉西福祉の会

山崎 フミ子さん

吉

西福祉の会の山崎フミ子と申します。

吉西福祉の会は、本町2・3・4丁目を中心に活動しておりまして、東急の西側が地域でございます。

今日は3月11日、東日本大震災の時の吉西福祉の会の災害時要援護者対策事業での対応と、それから有志で立ち上げている「一小地域の防災を考える会」の対応についてちょっとお話しさせていただきます。

ま

ず、吉西福祉の会の災害時要援護者対策事業についてご説明させていただきます。民生委員さんの区域が6ブロックに分かれておりまして、各ブロックに担当責任者を置き、要援護者1人に支援者2人をお願いして対応しております。そして、災害時には支援者は要援護者の安否確認をして、一時避難所にその情報を届けることになっております。

けれども、今回は一時避難所が設けられなかったこともあって、誰がそれを受けるか、市の方の対応が全く分からなかったんですね。それで私も担当責任者が一時避難所予定地である学校の運動場などに立ちまして、そこへ報告をしてくださいということ、支援者さんにはお願いをいたしました。

私はその一つの3ブロックの責任者をしておりますので、今回は3ブロックと4ブロックの対応をお話させていただきます。

3

ブロックでは、地震のあった3月11日は山梨県の笛吹市から百名ぐらいの方が視察にいらして、私はたまたま災害時要援護者対策事業のことについてお話をさせて頂いたところでした。皆さまがお帰りになって、ほんと一息入れているところに、これまで経験したこともないような大きな揺れが襲ってきました。

地震が落ち着くと、まず「要援護者の方は大丈夫だろうか」という思いが浮かびまして、あわてて電話を掛けました。最初の3件ぐらいは電話が通じて、無事の確認が出来ましたが、それ以降は電話自体が通じにくくなりました。

そ

の後、支援者の方から要援護者無事の連絡が入るようにはなったのですが、依然連絡のつかない支援者の方もありましたので、私は自転車で、要援護者のお宅を3軒ほど回ってみることにしました。

そうしたら、私が訪ねた要援護者宅に支援者の方も安否確認に来て下さっておりまして、そこで顔を合わせる事ができましたね。皆さんがきちんと対応して下さっていることを実感して、とても嬉しくなりました。

それから、要援護者の方のところだけではなくて、ご近所のお一人暮らしの方の所にも、ご自分の判断で回った支援者の方のいたと聞かしまして、支援者の方々の意識の高さにもびっくりいたしました。

結

局3ブロックでは、5時ぐらいに全員の無事が確認できまして、たまたま電話が通じて、会長の所に報告するこ

とが出来ました。やっと一安心することができましたが、電話がつかないことがこんなに不安なものかと思いました。

そ

それから4ブロックの対応もご紹介いたします。とても早く、4時ぐらいから責任者のもとに支援者からの連絡が入るようになりました。

また吉西福祉の会では、毎年3月3日に一人暮らしの高齢者の「お雛祭りの集い」をやっているんですが、その同じテールブルになられた高齢者の方：要援護者ではなかったんですが、その方たちのことを心配して、役員の方が安否確認に回られたと聞きました。

それから責任者でもある民生委員さんは、その前に独居調査がありまして、要援護者の方だけではなく、お一人暮らしの方の所も、ご自分の知る限りを回られたと聞きました。皆さんの素晴らしい行動に頭が下がりました。

他

のグループから聞いたお話もさせていただきますと、以前支援者をされていた方で、今は支援者から外れていらっしゃる方が、お隣の一人暮らしの高齢者の方のことを心配されて、ご自分の家に連れてこられて、面倒をみられたという報告も受けました。

地域、地域に合った対応で、素晴らしいと思い、「地域の底力」というものを感じました。

そ

れから、吉西福祉の会の有志により、平成21年に立ち上げた「一小地域の防災を考える会」の動きをちょっとお

話させて頂きます。

5時ぐらいだったと思いますが、役員が学校に様子を見に集まりました。市からの連絡は何にもなく、しばらく待機していましたが、解散いたしました。

副会長は、お帰りになってからすぐ、市の防災課に「学校などを帰宅困難者に提供する動きはありますか？また、個人的に何かお手伝いすることはありますか？」とメールでお聞きになったそうです。そうしたら、市の防災課からは、「現在学校以外の駅近くの公共施設で対応している」というお返事だったんだそうです。

副会長は市へ連絡を取り、きちんと対応されましたが、一小地域の防災を考える会には情報は何にも入らないままでした。

私も、せっかく昨年、一小には災害時用のマンホール直結型トイレが10基配備されたのに、それらを活用できないのだろうか、ずいぶん気をもみました。

後

から聞いたところによると、市の対応は震度6弱以上を想定しているので、5弱の今回は対応なしという判断になったとのこと。

ただ、そのような「市が何を基準に、どのような考えで行動しようとしているのか」ということの全体像が、なかなか見えてこなかったことで、私たちは不安でいっぱいでした。

今回の震災においては、地域ではみなさんそれぞれが素晴らしい対応をされたと思いますが、反面、市からの情報伝達の不足が浮き彫りになったと感じております。ぜひ今後の課題として、検討をお願いしたいと思っております。

吉西福祉の会・ひろばひよこ

中村 三重子さん

吉

西福祉の会の活動の一つとして、「ひろばひよこ」という子育て支援グループをしております、中村です。

月

1回、未就園児までの親子を対象に集まっているんですが、不幸中の幸いなことに、震災の日は活動日ではなかったものですから、直接的な被害はありませんでした。

ただその後も余震が続いておりますので、4月に「参加者の方へ」というプリントを配りまして、「地震が発生した場合、下駄箱周辺が混乱する可能性があります。ビニール袋をお渡ししますので、靴を入れて、バッグに括り付けてください。避難するとき靴が大切です」というご案内をいたしました。

ま

た地震の後、スタッフから「私たちに出来ることとして防災頭巾を作ってはどうか」という声が上がりました、今そのための準備をしている段階です。

市販のものは大人用が4410円、子供用が3990円と高額なものですから、なかなか購入して揃えるというわけにもいかないんですね。ですから、自作してみようと。

ただ、中が綿なものですから、市販品のような防火性は期待できなかったりして、私たちもまだ色々検討をしている段階です。ぜひ、皆さんのご意見もいただけたらと思っています。



東町では…

東部福祉の会

原利子さん

東

部福祉の会の原と申します。

直後の街の様子は、南町さんや吉西さんなどとそう変わらないと思うのですが、一言で言う、深刻な状況として対処すべきかどうか判断に迷うような、微妙な揺れだったと思うんですね。

例

えば、東部福祉の会は災害時要援護者対策事業のモデル地区ですが、これは避難所が立ち上がるような、本当に酷い災害を前提に考えられていますので、支援者の方が集めた安否確認の情報を、学校に開かれた一時避難所に届けるという仕組みになっています。でも今回はそれは開設されておりませんし、そうなるにせつかくの安否確認情報もどこに持って行っていないかわからない。

また支援者の方も、もっと揺れが酷かったら全員安否確認に行ってくださいと思うんですが、丈夫な家で何もモノが落ちたりしなかった方は、「え？そんなに酷い揺れだったの？じゃあ今から行ってくる」っていうような温度の方もいたりして。

こ

ういう微妙な揺れのケースって、実はあんまり想定していなかったのです。

コミュニティセンター九浦の家も、どういうわけだか地震の

ことに関心が強くて、これまでもニュースなどで繰り返し繰り返し防災についての記事を載せてきましたが、ついつい大地震が来たときのことに頭が行ってしまっていて、こういうケースまでは予想していませんでした。

想

定どおりに行かなかったことというのは他にもありまして、特に今回一番きつかったのが、情報がきちんとつながらなかったことでした。

電話は地震後間もなく通じなくなっていましたし、避難所が立ち上がっていないので、情報の集約をするポイントもなければ、市からの情報も下りてこない。

こ

れまでも市の防災訓練や、自分たちで実施した防災フェアを通じて、情報が大事だということは十分に分かっていたんです。だから、誰か一人、核になる人はウロウロしないで、座って、情報を集めて、正しい情報を発信する役に徹しなきゃだめだねって、常々確認しあっていたんですね。

なので、今回、ご近所の方がみなさん出ていらして、お互いに無事を確認し合って、「あそこの家どうだ？ちょっと行って見てくる」「大丈夫だった」っていう状態になった時に、災害時要援護者の台帳を預かっている私は、これは動かずにじっとしていなければならないと思って、一度家に入りました。

で、まあ1時間は我慢したんですけど、本当に何の情報も入ってこない。不安でしょうがないので、ついに夫に「誰かいらしたら全部受けといてくれ」って言って、自転車に乗って、東町の地域を回りだしました。

まず第一に、自分の担当の支援者の方の安否を確認しました。それから町の中の様子を確認して回りました。

家屋の被害って言うのは、あんまりなかったんですが、大谷石の塀が壊れている箇所が複数ありまして、あとは屋根がへこんでるかなっていうお宅が何軒ありました。常々マークしているご高齢者が住んでおいでの古い造りのお家は、外から見たところはなんともないので、まあ大丈夫かなと。

町を回る中で、同じように安否確認で走り回ってる民生委員さん、ケアマネさん、在宅支援センターの方、それからヘルパーさん、いろいろお目にかかりました。

そんなこんなで、とりあえず大丈夫そうかなという状況が見えてきたので、ちよつと薄暗くなるころに家に帰りましたが、結局どこからも電話もメモも入っていませんでした。

この「情報」ということが最大の反省点になりました、地震の後、福祉の会では、要援護の対象の方にお見舞いのお手紙とアンケートをお送りすることになりました。

質問項目は「今回、地震の時お一人でしたか?」「4、5時間以内に誰か訪ねてくれましたか?」「家族・親族に連絡が取れましたか?」「2、3日の食べ物・備蓄はありましたか?」「水の備蓄はありましたか?」「警報器は設置済みですか?」という6点で、131世帯にお出しして、うち54通のお返事を頂きました。

中身をご紹介しますと、まず「地震の時お一人でしたか?」という問いには「いいえ」が33もあったんですね。これは、デイサービスに行っていて、みんなと一緒にだったという方が結構

いらしたんです。そういう意味では、地震が起きた時間がもうちよつと後だったなら、だいぶ違った結果になったと思います。

それから「4、5時間以内に誰か訪ねてくれたか」という問いには43人が「訪ねてくれた」と答えてくださいました。

で、「訪ねてくれていない」という回答もあったので、気になって後でその方の支援者に言ったら「ちゃんとしてるよ」って。行って、しかもガス栓の復帰をして、お部屋の中をちゃんと見たのだけど、ご本人は忘れてしまわれてるという：

ですから、支援者さんをお願いしている立場の福祉の会としては、「そういうこともあるけど、よろしくね」というフォローもしていかなければいけないわけです。

それから、家族・親族に連絡を取れたかという問いには、大部分の人が「はい」でした。

また、食べ物も意外と皆さん冷蔵庫にあるようですが、お水の備蓄は、17名が足りないということでした。

この結果を見て、災害時要援護活動のために頂いてるお金の残があるから、「じゃあこの際、水買って配ろうか」とって、すぐお店に行きましたが、もう売り切れでありますでした。

そういうこともありますので、今後、独居の方とか、認知症気味の方とかの所は、もう無理にでも買って置かせていただいた方が良くかなという風に思っております。

それから、警報器は意外と設置されていて、まだのところも消防署などにお願ひすれば取り付けて下さるそうなので、今後さらに普及に取り組んで行こうと思っております。

自由記述では「家族が帰宅困難でなかなか帰ってこなくて、不安だった」という声がありました。

こうして見ていくと、要援護者の方へのアクセスは、比較的高い確率で出来ているけれども、その先の情報集約と伝達に問題があるというのが見えてきたんですね。

で、今回特に問題になった、避難所が開設されない時の情報をどこに届けるかというところについては、今検討中：というよりコミュニティセンターで受けてもらって、それを福祉の会が自転車で集めるのが一番いいのではという話になりかかっているんですが、ただ、東部福祉の会は3つコミュニティセンターを抱えておりますので、一か所がOKでも、全部が足並みそろわないと出来ませんので、今検討していただいているところでございます。

それから、コミセンのことについてもお話させて頂きたいと思いますが、先ほど九浦の家は非常に防災について関心が強かったということを申し上げました。

市の防災訓練にも、コミセンとしてブースを出し、市から配布されている防災用具セットや、防災ウォッチングラリーでまとめた地域の防災マップ、災害時用の伝言票に工夫を加えた改良伝言票みたいなものを展示したりしてきました。

2004年からの3年間は、総会で年間テーマを「災害とコミュニティセンター」としまして、3年目の2006年の総会では、災害時は東コミは弱者優先に使うことにしようという合意を取りました。何かあったときには、元気な方は、申し訳ないけど譲っていただいて、まず地域における弱者支援の場所として確保しようと。まだ具体的なことは決まってませんが、そういう気持ちでおります。

2 007年からは、東部福祉の会とコミセンで一緒に防災フェスティバルをかねて避難所体験なども企画してきました。

東町では、一時避難所になるのは、三中と本宿小の2箇所なんですけど、このうち三中の体育館というのは地下2階なんです。だから前々から、ここは災害時の避難所としては不適切だと言いつつ暮らしてきたんですけれども、なかなか行政に分かっていただけない。なので、これはもうみんな体験して、ダメ出しをしようということで。

で、これがやっぱりやってみるだけの価値があつて、いろんなことが分かりました。夜中泊してみるとゴキブリがシャツと走ったり、蚊が入ってきてブンブン音がしたり。蚊が入らないようにカーテンを閉めると、もう暑くて耐えがたい。

それから、あんなに足音が響くところだとは思いませんでした。手回しのラジオとライトの大音響、天井の電灯はまぶしくて寝られない、消すと怖くて歩けない。もう本当に考えることが一杯できてきました。

また、今の市の防災計画では、地域ごとにみんな一緒に同じ避難所に入るようになっていっているんですが、例えば認知症の方、あるいは発達障害のお子さん、そういう方々にとって、大勢と一緒に押し込められるっていうのは、すごいストレスなんです。それは同時に、一般の避難者にとっても、大きなストレスになります。

それじゃあ成り立たないから、お寺でも教会でもどこでもいいので、早く個別の場所と市が契約して、確保してほしいっていうのを、今、発信しているところです。



災害弱者と

むさしの未来まちづくりたい

その周辺は：

岩崎 みどりさん

岩

崎と申します。共生のまちづくりを考える「むさしの未来まちづくりたい」に参加してます。

私の方からは、災害弱者の方々が、地震とそれ以降の社会状況の中で、どのような困難を感じているかということについてインタビューした結果を報告させていただきます。

「災害弱者」というと一般に、障害者、傷病者、高齢者、乳幼児、妊婦などがあげられますが、これまでのお話の中で、要支援の高齢の方たちのことは出て来ましたので、ここでは主に障害をお持ちの方たちの事例をまとめてあります。

で

は早速資料を見ながら聞いていたきたいと思います。当日の問題として、まず帰宅の問題が出て来ました。

車いすの方や知的障害がある方でも、行動範囲は市内に限りませんので、外出していれば当然、帰宅難民になります。単独行動の場合は、より周囲の障害理解が必要となりますが、知り合いが居ない中でそういう理解が期待できるかどうかですね。

次

にトイレの問題です。多機能トイレ自体は、最近かなり整備されてきていると思うんですが、今回駅が閉じてしまったように、駅や大型店舗が閉まると多機能トイレはほとんどありません。そこで、私たちは前から言っているんですけれ

ども、災害時のためにも駅の多機能トイレは、改札の外に作って欲しいのです。残念ながら現在は、国土交通省のマニュアルでもそうはなっていないんですね。

ミカレット（公衆トイレ）についても、より使いやすくなるために、照度や衛生管理の見直しをしてほしい。同時に、多機能トイレ空白地帯への一層の設置もお願いしたいと思います。

また、多機能トイレは、ついている手すりの形状によって、利用できる障害が違いますので、保管してある仮設用の多機能トイレのタイプを確認してほしいと思います。

今

回は地震当日の停電はありませんでしたが、エレベーターが使えなくなったところがありました。

このエレベーター停止の問題は結構大きくて、地震などの際にはエレベーターで避難しないようにと言われてますけれども、実際に停止してしまうと、取り残される人が多数出るということです。これは車いすユーザーだけではなく、足の悪いお年寄りや、高層階に住んでいる方などともそうだと思います。

それから、震災後の燃料不足の影響でムーバスや路線バスの運行が一部止まったことがありました。今回は事例としてはあがってきませんでした。その時に、日頃支援を必要としない軽中度の障害者や高齢者が、買い物はどうしていただろうかという問題もあると思います。

ま

た、食料・水のストックですが、毎日買い物に行くことを運動代わりの日課にしていたので、あまりストックしていなかったという方がいらっしゃいました。これは結構盲点

なのではないかと考えています。

ストックについては、原さんのお話にもあった通り、なるべく周りで勧めていたのだと思います。ストックに余裕があれば、困っている人に分けてあげられるということで、自分だけじゃなくて周りにも助け合いが出来るということですね。

次

に通信・情報の問題があります。当日つながりやすかったのが公衆電話・固定電話・インターネットです。

事例の中に耳が聞こえない方のFAXが使えなくて困ったというお話があるんですが、そういう方の場合、インターネットを利用すれば情報を捉えられるんですね。

そこで、ぜひ障害者・高齢者向けのIT講座をさらに充実させて欲しいと思っています。これは行政もそうですし、コミセンでやってらっしゃる所もありますけれども、具体的にはユースサイトや市のサイト、ツイッターに接続して検索できるところまで教えていただければ、情報弱者にならないですむと思います。

ま

た、当日以降の話として、節電対策の問題があげられます。実は町のバリアフリー、ユニバーサルデザインは、電気に負っているところが大変大きいんです。

例えばエスカレーターが止まると、車いすの人は大幅に行動が制限されてしまいます。

「周りに声をかけて助けてもらえばいい。昔はみんなそうしていたのだから」というような声もありましたが、現在の都市構造はかつてのそれとは比較にならないほど、駅は高架だしビ

ルも高い。それから年齢構成も違う。助けを求めようにも、周りも高齢の方ばかりというような状況が現実起きていてるわけです。精神論だけでは解決しえないことをわかっていただきたいと思います。

また、エレベーターがあればエスカレーターが止まってもいいだろうというのも乱暴な話で、杖をついている方など、脚が不自由な方が、すごく遠回りをしなくちゃいけなくなるわけです。そのへんをもう少し想像力を働かせて欲しい。その上で長期的に負担が少ない方法を見つけていく必要があります。

それから、夏の暑さ対策にも電化製品が欠かせません。特に高齢者や障害者で、体温調節が難しい方にとっては夏の熱中症対策にエアコンが欠かせません。

それ以外にも、例えば電気ポットは保温で電気を使うので無駄だと言う声がありますが、見守りホットラインがついてるものもあります。あと食洗機なんかも、それがあから一人暮らしをやっているという方もいらっしやいます。

ただ節電、節電と言うのではなく、その人の生活習慣に合わせた節電方法を考えることが大事で、そういうことを相談できる窓口が必要だと思います。

そ

れから最後に、夏の電力使用のピークはエアコン利用と高校野球のテレビ中継が重なるときだと言われています。コミセンとかテンミリオンハウスで、みんなワイワイ楽しみなが見れば、節電にもなるし、今まであまり地域に出てこなかった人たちも気軽に出てこられるかなと、パブリックビューイングの提案も書き添えました。



行政では…

防災安全部部长

笹井 肇さん

防

防災安全部長の笹井でございます。

今回の震災では、今までの計画が十分に活かせなかった所が多々ありまして、多くの課題が見つかったと認識しております。また非常に地域の皆さまのお力に頼るところが大きかったなど実感しております。

ま

ず今回の東日本大震災について、私ども防災安全部の方でまとめたものをちよつとご報告したいと思ひます。

震災が3月11日金曜日の14時46分。市いたしましたしては、直ちに市長を本部長とする対策本部を開催いたしました。

幸いにも人的被害についてはございませんでしたけれども、エレベーターへの閉じ込め事案が1件ございまして、救急隊へ救出のお願いをいたしました。

結

構影響が大きかったのが子ども関係で、交通や通信が遮断をされてしまった結果、保育園児のご両親との連絡が取れなくて、宿泊体制を取って、明け方ごろにようやくお父様お母様が引き取りに来られるという状況がありました。

小中学校でも同様に、安否確認が出来ず家に帰れないというケース、それから先程のお話のように、南町や境南の方ではコミセンの方で預かりいただいたケースもございました。

それからちようど卒業遠足の時期でございましたので、二中が読売ランド、三小・一中がディズニールランドに行っておりまして。一時は、戻ってくるのが困難なので、ディズニールランド内で宿泊させようかという案もあったのですが、ご案内のようにディズニールランドでは液状化が発生いたしましたので、なんとか1校分のバスに2校分の児童・生徒がギュウギュウ詰めになって帰ってきました。

ディズニールランドを出発したのが23時30分。明け方の5時に市内に到着して、保護者への引き渡し完了は5時半ということでございます。

次

に、帰宅困難者の問題ですね。

井の頭線をはじめとする私鉄は、午後10時台にはほぼ運転を再開したのですが、JRは一昼夜にわたって運行停止をいたしましたして、駅前周辺に滞留者が招きました。

我々としては関東バスや小田急バスに増発と延長のお願いをしたわけですが、バスはあっても、JRが止まっているので運転手さんが来られない。ですから、現有の勢力で対応せざるを得なかった。

結果として、吉祥寺では、多い時には2千人近くの方が帰宅困難者として駅周辺に溢れる事態となつてしまいました。

そこで、午後9時から順次、公共施設の開放を始めまして、吉祥寺では、商工会館・公会堂・本町コミセン、三鷹駅では芸能劇場、武蔵境では市民会館とスイング、それから歩いて帰る人向けの一時利用ということで、街道沿いの文化会館を開放しました。

また市内にある学生寮でひび割れが起きまして、市のほうに「ここには泊まれないので何とかしてほしい」というご相談があったものですから、吉祥寺図書館を深夜2時に開けて、集団での避難場所という形にさせていただきました。

各避難場所では、毛布・水・クラッカーなど市の防災備蓄品を提供させていただきまして、当日宿泊された小平・国分寺・東大和などに帰宅予定だった方から今だにお礼のお手紙を頂いているところでございます。

次

に市内の建物被害についてですが、もう皆様ご承知のとおり、市庁舎の議場の天井材の落下、総合体育館のメイシアターのパネル一部落下等がございました。

それからブロック塀の倒壊が11件ございまして、これらは全部、補強措置がされていない大谷石の塀でございました。

また瓦の落下等、一般住宅の被害につきましては、目視調査で86件を確認しております。そのうち、ここにカッコ書きしてある24件というのは、市職員や消防団などが対応にあたったケースでございます。

その際、危険排除・安全措置の方針としては、消防団とも相談して、家主さんにご了承を頂いた上で、「倒れそうな塀は倒しちゃおう」「落ちそうな瓦などは落としちゃおう」ということとしました。その方が2次災害を防げるんじゃないかというのが、真夜中の我々の臨機応変な判断でございました。

それから、当日以降の状況として、計画停電への対応、福島原発事故、水道水の問題、さらに被災地への支援などの取り組みもございました。

お

およそ一連の状況としてはそんな所なんですけど、そんな中で我々が一番悩ましかったのが、市民の皆さんへの的確な情報伝達の手段が確保できなかったことでした。

防災行政無線が聞こえないという指摘に加え、公共施設やコミセンについては防災用MCA無線で連絡が取れるんですが、それ以外の細かい情報伝達手段が止まってしまった。

中規模の複合災害でこれですから、大規模になるともっと情報伝達が難しくなることが予測されるわけです。

ですから今後の教訓として、あらかじめ「こういう風にしましょう」というルールを家族や地域全体で作っておいて、誰かからの連絡を待つということではなく、自助・共助・公助で、自分達で自主的に動けるような仕組みを作っておいていただくことが必要かなと感じております。

い

ずれにしても、まだまだ課題は多くございますが、逆にこの震災をきっかけに、広く色々な関係機関や地域団体が協力しあったり、自主的な判断で活動していただいたという、貴重な経験や教訓を得たという部分もございました。

例えば、成蹊大学でも一般の帰宅困難者の方を受け入れて頂いたようにございますし、各企業：第一ホテルさんなどでも帰宅困難者を受け入れていただいております。

今後、各企業・事業所については商工会議所とも連携し、また、大学などについても、災害当日の状況についてより細かな調査を実施しまして、そういった経験や教訓も反映させながら地域防災計画の見直しを進めて行きたいと考えているところでございます。

健康福祉部部长

三澤 和宏さん

健

康福祉部長の三澤でございます。

今回、このような大きな地震を初めて体験しまして、個人的にも、行政の一員としても、気づいたことがいっぱいありました。そういった気付きを共有しようということで、こういう機会を設けていただいたことに感謝しております。

ま

ず、今回の大震災を振り返ってみて、どの程度対応が出来たのだろうかということなんです。笹井部長の方からは、計画がなかなか上手く活かせなかったというお話がありました。けれども、私は、むしろ計画があったからこそ動けた部分が大きかったんじゃないかと思っています。

もちろん事前に想定していた計画と、現実起きたことの違い、色々なギャップがあったわけですが、大きな方向性自体は間違っていないかと思っています。

ですから、今大事なのは、今回の震災を通じて気づいたことをきちんと計画に反映させて、より実効性の高いものに変えていくことではないかと思っています。

実は、私も2年前の新型インフルエンザの流行の時にも同様の経験をしまして、その時もマニュアルを用意してたんですが、実際にはなかなかその通りには物事が運ばなかった。現実の状況に合わせて、マニュアルを読み込んでいくと言うか、マ

ニユアルと現実のギャップを埋めていくと言うか、そういう作業が必要でした。

今

回の地震の話に戻りますと、原さんのお話にもありました通り、微妙な揺れでした。

災害時要援護者対策事業の標準マニュアルでは、震度6弱以上からこの事業が動くことになっていて、一時避難所が設置され、そこで安否確認の情報収集をすることになっています。

ところが今回の地震の場合、武蔵野は震度5弱ということで、そのマニュアルからすると、動かなくてもいいということになるわけです。

けれども、実際には地域の皆さんが安否確認に走ってくださいます。地域社協、福祉の会だけではなく、民生委員さんとか、いろんな方が動いてくださった。

山崎さんのお話の中に「地域の底力」という言葉がありましたけれども、私どもとしても、非常に頼もしいな、ありがたいなという風に感じました。

「災害時要援護者対策事業」に関しては、大変だ、大変だというお声も頂いていて、どうやって継続して行かかっていうところが非常に大きな課題なんですけれども、「やっぱりあって良かったな」というのが、もう本当の気持ちでございます。

行

政の側の動きについてもお話しさせて頂きますと、震災当日は私たち健康福祉部も安否確認が主な活動となりました。電話や、あるいは場合によっては訪問をして、要介護高齢者や障害者の方の安否確認を行いました。これについても、

特にマニュアルがあったわけではありませんけれども、それぞれの判断でやったわけです。

で、後で確認したところでは、介護保険事業所なども、それぞれやはり訪問をしたり、電話確認等で安否確認をしていたようですし、先ほどから皆さんにご報告いただいたように、市民の皆さんも安否確認に走って下さった。

結果的には今回、かなり密に安否確認の網の目が出来ていることを実証できたのではないかと感じています。

た

だ、今回たまたま地震が起きたのが平日の昼間だったわけですね。それで、市役所にも職員がいましたので、手分けして安否確認等が出来たわけですけれども、例えばこれが夜だったらどうなったか？あるいは休みの日だったらどうなったか？休みの日で、もつと揺れが大きくて、市役所に出て来られる人間が限られていたらどうなったのか？

そういうことを考えると、今回ある程度できたから大丈夫ということではなくて、例えば安否確認をする人をきっちりリスト化しておくとか、もつともつとやれることがあったんじゃないかなという反省もしております。

そ

れから、今回は計画停電という、これも初めての経験をしましたわけですが、人工呼吸器とか、吸引器とか、電氣を使って命をつないでらっしゃる方々がいらっしゃるわけですね。そういう方々に情報提供することも私たちの大事な仕事となりました。ただ直接ご本人にというよりも、色んな事業所に連絡をする、あるいはドクターに連絡をすると。最終的には日

赤病院の方にも、まあ個人名は出しませんでしたけど、こういう症状を持つ方がこういう所にいらっしゃるという情報共有などをいたしました。

で、情報を集めることもそうですし、情報を出して、それを受け入れて頂くということもそうなんですけど、医療・介護・福祉の連携が大事だと言うのはもうずっと昔から言われてた事なんですけど、今回、ある程度迅速に情報共有ができたのは、そういう日頃からの連携の取り組みが一つ実ったところなのかなと思っております。

あ

と、実は当日、市役所の方にも、不安なので家に帰りたいくないって言う方が5、6組いらっしゃいました。結果的にはその日のうちに皆さんお帰りになったんですが、これも従来のマニュアルでは想定していなかったことでした。

つまり、一時避難所を立ち上げるまでではないけれども、身を寄せる場所、安心できる場所が欲しいという状況が有りうるということですね。今後、そういうことへの対応も考えていかなければならないと感じております。

と

にかく、初めての体験でしたので、臨機応変に色々なことをやらなきゃなりませんでした。

で、こういう災害時には、どれだけ臨機応変に動けるかどうかというのが一つの決め手になると思うんです。しかし、だから計画やマニュアルは不要なのかというと、そうではなくて、むしろ、計画があり、訓練をしていたからこそ臨機応変に動けるといいう、その賜物なのかなと感じました。以上です。



南町では…

南町福祉の会

吉岡 諒子さん

地

震当日は、先ほどお話したように、少々興奮状態のうちにバタバタと過ぎていったんですが、週が明けた頃からまちの中の情報が色々入り始めました。

その中で、買い占めが始まって、障碍者の方がお買い物が出来なくて大変な思いをしていると言う話を耳にしました。

そこで、ゆとりえ在宅支援センターの方にお電話しまして、「買い物で困っていらつしやる方があったら、私達がその辺を走り回って買ってきますよ」って申し上げたら、「すごく助かります」っていうことでした。

その話を、会う人会う人にしたら、あつという間に十何人、「私もお手伝いします」って言って下さる方が見つかった。

そのとき、地域ってやつぱり繋がっているんだなと感じました。やはり、日頃からコミュニケーションをとっていることがとても大切なんだと思います。

今

回の地震のあとで、ある民生委員さんに「こういう非常時のとき、マニュアル通りじゃなくって、冷静な判断と決断と実行力が必要ですよね」って言われ、本当にその通りだと思いました。

今回の体験を通して、地域で防災への関心が強まったこと、また、三小PTAのお母さんや地域の若い方から、「こんな時に、若い私たちが安否確認をしないといけないですね。」と声をかけられたことなど、今後のまちづくりにつながる動きも出て来ています。

これを機に、南町をもっといい町にしたいです。

武蔵野市吉祥寺南町コミュニティ協議会

小餅 友子さん

地

震の2日後にゆとりえの事業報告会がありまして、そこに出席したんですね。

そうしたら、コミセンの2軒隣に吉祥寺南病院という救急病院がありまして、帰宅しようと歩いてきて足にマメが出来たような方の治療をなさっていたそうなんですが、「ちょっと休ませて欲しいとすぐ言われた。南町コミセンに休む場所があったんだったら、そこにまわしてあげれば良かった」って言われたんです。ですから、つくづく、まず近くできちんと情報共有をしなきゃいけないんだなっていうことを感じました。

今回の震災は、大変不幸な出来事でありましたけれども、その体験を通じて、色々地域課題が見えてきたなと思っています。

た そんな中で、ひとつ胸を張って言えるのは、今回、地域は色々動いたということですね。

先程からお話に出ているように、震度5弱だから、公助の仕組みはきちんと動かなかった。でもそんな中で、地域は自主的に判断して、共助・自助でがんばろうということで、色々動いたわけです。

私も、朝になって、コミセンにお泊りになった皆さんにお話するときに、「武蔵野市のコミセンは公設民営で、自主三原則というのがあって、地域の市民にまかされているんです。だから今回、行政の判断は有りませんでした、私達の判断で皆さんをこういう風にお泊めすることが出来たんですよ」という説明をいたしました。

この「いざという時に、コミセンを核にして、地域の市民が自主的な判断で動けた」というのは、今後に繋がる非常に大きな収穫だったと思います。



本町では…

吉西福祉の会

山崎 フミニ子さん

吉 西福祉の会では、平成24年度施行予定の地域福祉計画に声を反映させるべく、4月8日に地域福祉懇談会を開催いたしました。50名の方が参加して下さいまして、338もの意見をいただきました。

また、地域福祉懇談会に出席できない方に対しまして、前もって、2月から3月にかけてまして、回覧板でアンケート調査を実施しました。こちらにも、724通の回答がございまして、その中の「この町に住みつづけたいですか？」という問いに対しては、なんと7百名以上の方が「住み続けたい」と答えて下さいました。このアンケートは、まさに私達の宝であると思っております。

で、ちょうどそのアンケート調査の最中に3月11日の地震が発生したこともありまして、防災・防犯に関する意見も、非常に多く寄せられました。

それらの意見も反映させまして、大変生意気なことを言うようにで恥かしいんですが、地域が少しでも良くなりますように、二点ほど提案をさせて頂きたいと思っています。

―― つ目は、全市に展開しております、災害時要援護者対策事業に関してでございます。

今回の地震に際しては、地域から見えて、市の対応が全く分かりませんでした。ですので、要援護者対策事業に關しても安否確認をした情報を市の何処が受けるのか：防災課なのか、生活福祉課なのか、全く分からなくて、どのように動いたら良いのか本当に困ってしまいました。

支援者さんや要援護者さんからは、「今回は大丈夫だったけれど、もし怪我をした人がいた場合はどうするの？」というような質問も出ておりまして、ぜひ全市に展開している災害時要援護者対策事業を市が受け止めるシステムの構築を、早急にお願ひしたいと思っています。

—— つ目の提案は、一時避難所の運営組織についてです。

市内に20箇所ある一時避難所で、運営組織が出来ている所は4箇所しかないという風に聞いております。

先程お話した「一小地域の防災を考える会」はそのうちの1つですが、立ち上げる際に、市の防災課に相談に参りましたところ、「全て地域の方で立ち上げて欲しい」と言われまして、「えっ」とショックを受けました。

それでも必死で取り組みまして、何とか立ち上げる事が出来ましたが、今のやり方では、4箇所しか出来ないのも当然じゃないかなっていう風に思います。：すいません、本当に生意気なことを申しますけれども。

こ

のような状況を解決するためには、ぜひ市役所の防災課の中に地域担当の係を作っていただいたいと思います。

例えば市民社協の場合、各地域担当が居りまして、会合には必ず出席して下さっています。同じように、防災課でも担当者が地域に出て、住民と話し合い、一時避難所周辺の地域の各団体に呼びかけて頂きたいと思っています。

地域も一緒に協力いたします。例えば各商店会、各団体、学校、PTA、青少協、コミセンなど。職員が中心になる事で、市民の反応は全く違うと思います。

市全体で取り組むことにより、一時避難所運営組織がスムーズに立ち上がるのではないのでしょうか。現在立ち上がっております所には、運営のアドバイスもお願いいたします。

一刻も早く安心・安全な地域になって欲しいと願っております。私も、少しでもお役に立つよう頑張ります。



東町では…

東部福祉の会

原 利子さん

以

前から地域の中には「いざという時、避難所の立ち上げはどこが担うんだろう」という不安の声がありまして、消防署や消防団なんかからは、「自分たちは、災害時は火を消す仕事が一番先だから、当てにしないでくれ」って言われていますね。

それから、市の方からも、「職員は必ずしも武蔵野に住んでいるわけではないから、非常時には十分な人数が集まらないかもしれない」って囁かれ続けていまして、そのうちに住民の方でも、「結局、これは自分たちでやるしかないのかな」という覚悟がだんだん出来つつあるような状況です。

実

は防災のことをやっていると、行政に頼ってちゃ駄目だな、市民が臨機応変に動かなきゃと思う場面は多々あるんですよ。

例えば防災組織一つ作るにも、行政に「どういう組織作りをしたら良いですか？」と相談すると、ピラミッド型のイメージが出てくるんですよ。誰がトップで、次が誰で、その人がダメなときは…というような。

でも、訓練やフェスティバルなんかで体験してみると、これじゃ無理だ…と言うのがよくわかる。

実は最初の防災訓練のときに、本来だったらそういうトップ

になるような方が、松葉杖を突いて現れたんですよ。それで、仮設トイレの組み立て方の説明書をその方が持つてて、指示を出すんだけど、ちっとも組みあがらなくつて。たまらず若いお母さんが紙をひたたくつて組み立てたら、あつという間に出来ちゃったとか、そういうのがあるんですね。

とにかく災害時なんかには、臨機応変に動かなきゃ始まらない。そのためには、行政のように形から入るんじゃなくて、一人一人が自分の頭で考えて動けるような、そういう力量をつけていくことが大事だと思います。

そ

れから、そういう住民の核となる場所として、コミセンがとても大事だと思っています。

ウチの姉は阪神・淡路大震災の被災者なんですが、あの地震の後、コミセンの存在をとてもうらやましく思ったそうです。

自分が住んでいる近くに、そこに行けば情報がもらえるところ場所が有るか無いか。芦屋市では全部本庁に行かなければ得られなかった。そのことが被災した近隣住民同士の話し合いも妨げたし、復興までに時間がかかる原因となった。そういうことで、コミセンっていうのは、外からも「使いではあるよ」って言われています。

あとコミセンには防災無線があるんですよ。で、これで市と繋がってる。ただ、じゃあその防災無線で連絡した時に、市のどこが受けるかって言うと、防災安全部だと。防災安全部の人が福祉関係の情報をどうやって処理するんだろうって話になりました。在宅介護支援センターにも防災無線があるものから、ひそかにですが、「その情報はウチにください、その方

が速い」という話になっています。

これから市の方も囁んでいただいて、最終的にどうするかちゃんとまとめていかなきゃならないですけど、最も素早く伝わって、効果が生まれるようなことをしなくちゃいけない。

とにかく、コミセンは地域の情報集約・発信の拠点になれるし、人をつなぐ共助の拠点にもなれると思っています、ますますその重要性が見えてきたなと感じています。

ちなみに、代表は、自宅の安全確認20分後、コミセンに夜まで詰めました。



災害弱者と

むさしの未来まちづくりたい

その周辺は：

岩崎 みどりさん

私

の方からは二点。

やはり今一番心配なのは、夏の節電の事です。どうやって今年の夏を乗り切るか？あまりいい子になると、熱中症になってしまふと思います。これは、持病や障碍がなくても、元気な高齢の方たちでもそうですね。

二点目は避難所のこと。先ほど原さんのお話の中にもありましたけれども、ケアが必要な人がとても多くなっている中で、特別避難所というのをきちんと整備していただきたいと思っています。また、それを平時から広報する事が大事なのではないかと思っています。



行政では…

防災安全全部部長

笹井 肇さん

私

の方からは五点ぐらい追加させていただきます。

まず第一点は、地域の皆様にお願しております、自主防災組織の立ち上げの件です。実は、市の初動要員というのは158名しかおりません。ですから休日夜間に災害が発生した場合には、限られた人数の職員で対応せざるを得ません。

もっと言うと武蔵野市の職員はおおよそ千人ぐらいおりますけども、そのうち市内在住率が約23%。ですから、簡単に言うと2百人ちよつとの職員しか市内に在住しておりません。その職員も大規模災害が起こった場合、果たして市役所や割り当てられた各避難所にたどり着けるかどうか分からないというのが、今の武蔵野市職員の状況でございます。

ですから、どうしても地域の皆さんのお力を借りざるを得ないわけで、自主防災組織であるとか、避難所運営組織の運営・立ち上げをお願いしているところでございます。

―― 点目に、情報の伝達・共有・連携について。

今回、情報の伝達に非常に有効だったのが、FMむさしのさんやケーブルテレビさん。いわゆる地域密着型のメディアでした。

一方、防災行政無線は大変聞きづらい、聞こえないというところで、お叱りの電話をずいぶん頂きました。

その他に、ホームページ、電話対応のコールセンター、広報車、ツイッターもやりました。それでもなおかつ、掲示板に紙を張るといふのもお年寄りにとっては非常に大事なことがあるかもしれないということで、各掲示板にも貼らせていただきました。さらに、ごみ収集のパッカー車で「FMむさしのを聞いてください」というテープを流させていただいたりもしました。結局、情報伝達の手段は1つではないということです。

重層的なあらゆる手段を講じないと、なかなか皆さんへは情報が伝達できないし、共有できない。

まだまだ、現状で充分だとは思っておりません。さらに色々な情報ルートを開拓していく必要があると思っております。

次

に三点目、節電対策でございます。

岩崎さんのお話にもありましたように、電気によって生活を支えられている方がいらっしゃるわけですね。その方たちへのフォローをどうして行くか。これについては今、東京電力と関係機関で協議会を持って、ご指摘いただいたような相談窓口をきちんと作ってくれという働きかけをしています。

今週もケアマネジャーの全体研修会があったんですが、そこにも東京電力の方に来ていただいて、実際にサービスを受けている人に対しての情報提供や注意事項などについて、お話ししていただきました。

そんな感じで、東京電力さんの方から地域ごとに情報を伝達していくような仕組みをお願いしていきたいと思っています。もちろん行政の方も協力して、節電・熱中症対策に取り組んで行くつもりであります。

それから四点目ですが、原さんもおっしゃっていましたが、れども、コミュニティセンターの位置づけということについてです。

現在の地域防災計画では、コミセンは、小中学校に設けられた避難所が被災者の増大であふれた場合、避難所の補完・代替え施設としての位置づけになっているのですが、今回の震災における対応を見て、もっと積極的に活用できるのではないかと感じています。

コミセンは、地域の情報の拠点、共助の拠点ですし、役所と無線で連絡が出来るので、地域と行政を結ぶ拠点にもなれる。さらに、一時避難所のような、非常時でないと立ち上がらない場所と違って、常に地域の中に存在しているという点も大きいと思います。

例えば、健康福祉部で取り組んでいたといいます「災害時要援護者対策事業」についても、情報の集約、あるいは地域と行政の連絡拠点として、もう少しうまくコミセンを活用できないか？という話は当然出てくると思うんですね。

ただ、現在の仕組みでは、コミセンからの無線は私も防災安全部で受けることになっていますので、そうなると今度は、役所の中での横の連携が重要になってくるだろうと思います。防災は防災、福祉は福祉という縦割りではなくて、どうやって横の風通しを良くして、情報の共有と連携を図っていくか。その点も、しっかり取り組んで行きたいと思っています。

最

後に五点目、避難所のことについてです。
今回の東日本大震災では、津波の影響もあって、防災計

画で定められた避難所以外にも、ありとあらゆるところが避難所になりました。

例えば釜石市は人口4万人ぐらいですが、当初開設された避難所は80箇所以上です。場所も小・中学校だけではございません。消防団の詰所、公民館、お寺、女性のセンターなどなど、毛細血管のように、町のあちこちに自然発生的に避難所が作られた。津波被害の有無の違いがありますが、そういうことを考えると、武蔵野市における避難所設置のあり方も、今一度検討し直して見る必要があるだろうと考えています。

それから、避難所に行くばかりが避難生活ではないというのも、見落としてはならない点ですね。自宅が倒壊を免れて、家具転倒も防止できていれば、可能な限り自分のお家で生活を続けるような避難生活もあるわけです。

ただその場合は、在宅避難者へ必要な食料や物資を届けることであるとか、トイレをどうするかということを考えないといけないので、行政や地域でその人のところにアウトリーチしていく、出向いて行く体制を同時に作らないといけない。そのあたりも今後の課題となってくると思われます。

い、ずれにしても今回の震災は、私たちにとっても非常に大きな教訓になりましたし、地域の皆さまにとっても、色々なことを見直すきっかけになったのではないかと思います。

こういった教訓を活かしまして、ミシユラングリーンガイドで星をいただいた吉祥寺・武蔵野のまちが、本当に安心・安全な場所となりますように、皆様と一緒に頑張って行きたいと思っています。

三澤 和宏さん

私

の方からは、災害時要援護者対策事業について少し補足させていただきます。

この事業は平成19年から、吉西と東部の福祉の会でモデル事業としてやって頂いていて、今年度中には全市で安否確認の仕組みが整う予定です。

で

、始めにまずお伝えしておきたいのは、こんな取り組みを実現できている市区町村は、周りを見回しても他にはないということです。例えば東京都に「こういう取り組みが進んでいる所がありますか？」と聞いてみても、なかなか答えが無いんです。かろうじて自治体名が出てきても、調べてみると、手上げ方式だったりする。

手上げ方式というのは、災害時に援護が必要だという方に、あらかじめ自分の方から名乗り出たいただいて、その方々を対象に支援をしていくという方法です。

一方、武蔵野市は同意方式です。同意方式というのは、高齢者の方お一人お一人に、こちらからコンタクトを取って情報収集にうかがい、その際にノーと言われない限りは、要援護の対象とさせていただくという方法です。

つまり、名乗り出た方だけを支援の対象とするのではなく、原則的に全ての高齢者の方を対象にしているわけですね。

そういう意味では非常にきめの細かいことをやっていて、しかも全市的につけているのは、おそらく他に例がないんじゃないかと考えています。これもひとえに地域の皆様のお力のおかげだと思います。

こ

の事業の成否の鍵は、地域でどれだけ沢山の方に支援者としてかわっていただけるか、という点にあります。

実は、それに関して、最近面白いなと思った新聞記事がありまして、「震災以降、結婚相談所を、結婚して退会する人が増えている」というんですね。それから、「結婚指輪の売れ行きが伸びている」という記事もありました。

つまり、今まで結婚したいけれども、色々な条件があって踏み切れないでいた人たちが、震災以降、やっぱり大事なのは絆だということで、結婚を決断し始めているというんです。

同じように、私どものこの災害時要援護者対策事業の取り組みについても、「絆」という観点から関心が高くなっている時期なんじゃないかと思うんですね。私どももPRをして、ぜひ支援者の方をどんどん増やしていきたいなと思っておりますので、ぜひまた地域のご協力をお願いしたいと思います。

そ

れからもう一つ、これは皆さんのお話からも感じたことですけれども、支援者と要支援者の関係だけではなく、支援者の方同士のネットワーク、横のつながりが非常に大きな意味を持っているんじゃないかと思うんですね。

昔のような近所づきあいがある時代ならば、わざわざこんな仕組みを作らなくてもいいかもしれませんが、地域の関

係が希薄化している現代においては、それを補う仕組みを作っていないかなければならない。

皆さんのネットワークが発展していけば、自然とそういう地域の力が高まって、災害時以外でも、まちを元気にしていく効果があるんじゃないかと。そういう意味でも、この取り組みは非常に重要なものであると考えています。

そ

もそもこの要援護者支援事業というのは、笹井部長もちよつと言いましたけれども、最終的には避難所なり、自宅なりで安心した生活を送れるということが目標です。

ですので、最初にモデル事業でお願いした時には、そこに至る道筋として、避難誘導までお願いしようということを言っていました。安否確認をした後、避難所まで連れて来ていただくということですね。

でも良く考えてみたら、私たちも、どうやってそれをやるかという方法論の答えを持つてませんので、とてもそれは無理だろうということ、とりあえず安否確認だけお願いしますという今の仕組みになりました。そういう意味では、今の仕組みもまだ途上で、色々今後の課題があると思っています。

ただ、その一方で、いきなり完成形を求めてしまうと、途中でめげてしまう可能性もありますので、次のステップ、次のステップという風に、今出来ることを一つ一つ積み上げて行くことが大事だと考えております。

これからもぜひ、色んなご意見を頂きながら、一緒に取り組みを進めて行きたいと思しますので、どうぞよろしくお願いいたします。

質疑応答



会場からの質問・意見

ト

ツプバッターで申し訳ありません。境南コミセンの自主防災の責任者をやっております。

境南町には、防災トイレが3箇所、計17基ございます。加えて、今度「境南中央公園」という立派な公園がオープンしまして、そこにもトイレが4基、かまどが2個出来ました。

それで、あそこで防災訓練やっていいかっていうことをよく聞かれるんです。あそこには放水タンクもありますし、コミセンには簡易式ポンプもありますんで、あそこで放水訓練をしたというんですね。ということで、それがやれるかどうかをお聞きしたいのが一点目です。

それから二点目として、境南コミセンの防災のことをちよつとお話させて頂きたいと思えます。

パソコンでホームページを検索してもらうと、境南コミセンにどんな防災の装備があるのか、写真入りでちゃんと出てくるんですね。それを見て全国各地から視察においてになります。トップバッターは仙台の河北新報、山形、清水、名古屋大学、福島大学。次々と来て、一昨年は三鷹市の市議会も視察に来ました。訓練をちよつとやって見せてくれとか。笹井部長も、よくご存知ですけれども。

そんなわけで、境南の方では日頃からコミセンを拠点に自主防災の取り組みをしております、だいぶそれが浸透してきているかなという状況です。

西

久保に住んでおります。意見や質問ではないんですか、私の震災当日の経験をお話させて頂きます。

当日は、これまで体験したことのないような揺れで、本当にびっくりしまして、年上の友達何人かのところに、大丈夫かしらと思って、電話をしまくりました。ところが、全然通じないんですよ。で、やきもきしていたら、何時間か後にあちらから留守電を入れて頂きました。

それを聞いたら「要支援者のところを駆け回って安否確認していた」ということだったものですから、私より上の人がそういうことをしてくれていたんだと知って、私も慌てまして。

西久保1丁目も独り暮らしの方が多いものですから、10時過ぎていましたけれど7、8軒のお宅を、大丈夫ですか、怖くなかったですかって言って訪ねて参りました。そうしたら皆さん全然おとがめ頂かなくて、大丈夫ですよって喜んで下さいました。そういう報告だけさせて頂きます。



吉

祥寺東コミセンの代表をしております。先ほどからお話に出ているように、今回の地震では避難

所が開設されるまでには行きませんでした。

もし開設されていれば、そこはある程度大きな組織の事ですから、いろいろなことがちゃんと動いたんでしようけれども、その段階にまで至らなかった。なので、安否確認情報を持って行く先がないというような事態になったわけですね。

一方、コミセンは地域の人や情報が集まる場所として、だいたいいつでも開いているわけです。夜中でも、今回のように電話一本入れば開けられる。本町でも開くし、南町でも境南でも開いている。そういう役割を最初にやるのがまずコミセンの仕事じゃなからうかと。

私

は退職前は矯正施設に勤めていましたが、そういう所では地震になったらすぐ職員が全部役所に飛んでいくんですね。私も習慣づけられていましたので、揺れてすぐコミセンに駆けつけました。

で、コミセンで確認しましたら本が2冊くらい落っこちただけで大したことなかったんです。ところが、それを役所の方に報告しようと思ったら、電話が通じないんですね。幸い、古い市の内線FAXがまだ残っていました、それを使って協働推進課の方に連絡いたしました。

皆さん、安否確認をして全員の無事が確認できたんなら、その先の連絡をそんなに焦らなくてもいいんじゃないかと思うかもしれませんけれども、そうじゃないんですね。こういう災害時には、無事であるっていう報告が非常に大事なんです。

災害の時っていうのは駄目だったという報告は上がってきません。生きている人、無事だった人が報告をするわけです。結局

周りから安全だっという報告が上がってきて、抜けているところが駄目なんです。これは阪神の時でもそうです。今回の津波でもそうです。

そういうわけで、事故がなかった、安全であるという報告を初動で集める組織をちゃんと立ち上げることが必要だと思っています。そこを身軽に動けるコミセンがやろうかと、こういう話でございます。



本

町に住んでいます。

先ほどから、コミセンが中心になって防災や安否確認の取り組みを進める話が出ていますけども、私にはそのところがよくわからないですね。

例えば原さんのお話では、東町の方では、コミセンの役割として「弱者を優先する」ことを確認したとおっしゃってましたけれども、たまたま原さんの地域は、原さんがコミセンの委員長をなさって、その次は福祉の会長もなさってるから、非常に理解がありますけれども、全市的に見た場合には、必ずしもそういう理解にはなっていないと思うんですね。私自身も、コミセンの役割として、災害の時に先頭に立って動くんだとは聞いていません。

そういう意味では、もうちょっと災害になったときのコミセンの役割を、市全体の共通認識として、はっきりしていたかないと、地域ごとにバラつきがありすぎて、結局コミセンがどういう事を考えてらっしゃるかよく分らないんですね。

そ

れからもう一つ、私たち福祉の会が引き受けている「災害時要支援対策事業」のことですけれども、えらい長つたらしい立派な名前で、でも結局中身の部分では、安否確認しかやっていないんですね。「支援」という部分まではやっていない。だから、いつそ「安否確認事業」っていう名前に変えたらどうかって声もあるんです。

私は、福祉の会がこの事業を請け負った時の、一番最初の会長をやっていましたから、その時の議論の中では「一人で家にとり残されているお年寄りが居たら、安全なところに連れて行くべきでは？」と言ったんです。でも、「そこまでは難しい」って、まあ非常に反対が多かった。

私もなんとかこの事業を通じたかったですから、とりあえず「安否確認」までってことにして、でもいざ災害が起きれば、怪我をして血を流している人をほったらかして行くってことはないだろうと思ってスタートしたんです。

だけど、今回実際に動いてみたら、やっぱりいろいろ問題が見えてきたんですね。「安否確認」からして、先ほどから話に出ているように、行政のどこに報告を渡したらいいのかはつきりしなかった。まして、「支援」の部分は何も決めていないわけですから、動きようがなかった。

幸い、今回は怪我をしている人も、家から避難しないといけないような人もいなかったわけですけども、もしいたとしても、どうしていいか分からなかったんじゃないかと思えます。

そんなわけですから、とにかく「安否確認」にしても、その先の「支援」ということにしても、もっとちゃんと煮詰めないとうるがない。事業を始めてもう4年経つんですから。

そ

の際に行政にお願いしたいのが、やっぱりちゃんと音頭取りをしてほしいということです。

私たちは言われたことでいいと思う事は何でもやろうと思つてます。けどあんまりね、「そちらで考えて」「そちらで考えて」って言われることが多くて、ちょっとやっぱり困るって言うのもあつて。

色々と言つてすいませんが、どうぞよろしく願ひします。



境

南町に住んでおります。子ども関係のことでお尋ねしたいと思います。

今回、境南地区で実際にあつた事例なんです、小学生の兄弟で、地震の時下の子は学童保育で学校にいて、上の子は自宅に帰っていたというケースがありました。というのも、学童保育というのは対象が3年生までなんです。

で、こんな事態ですから、保護者が帰ってくるまでの間、上の子もいつしよに面倒を見てもらうことは出来ないんだらうかと学童の指導員さんに質問したら、無理であるというお返事でした。しょうがないので、上の子は我が家でごはん食べさせたり、他の仲間のところで過ごしてもらったりしましたが、これはもうちょっと何とかならないものかなあと。

青少協の担当者さんに聞くと、幼児の場合は、またさらに面倒を見るところが変わってしまうという話で、そうなるとう本当に兄弟バラバラの状態で親が帰ってくるのを待っていないきやならない。

今回の災害以上に大きな災害が起きた場合には、保護者の方も何日間も帰ってこれない、あるいは下手をすれば永久に帰ってこない場合もあるわけです。

普段、学齢ごとに対応する部署が違うのは無理のないこととしても、緊急時にはなんとか兄弟をいつしよに見てもらえるような仕組みは取れないだろうかと思っています。

そこらへんの所を今後、今回の教訓を生かして、検討していただけるのかをお聞きしたいと思います。



吉

西福祉の会の副会長をしております。

先程三澤部長の方から、支援者同士のネットワークというお話がありました。また先日、社協に提出する用紙をみましたら、そこにも予算立ての欄に、ひな形として「支援者のネットワーク作りの会合」と書いてあつたんです。

で、私たちの吉西福祉の会でも、ネットワーク作りの為に、支援者の方が集まる会合を、ぜひやりましょうという声が出たんですが、役員の皆さんで話し合ったら、やはり個人情報漏れが出てくるんじゃないかという事で、結局その話は無しにしたという経緯があるんですね。

そんなわけで、現場の方ではまだ議論が分かれているような状況なものですから、そんな中で三澤部長が先程おっしゃったのはどういう意味かな？と。

皆さんもどういふうにそれを解釈なさったのか、ちょっとお聞きしたいと思います。



報告者

防災安全部部長

からの応答…

笹井 肇さん

最

初のご質問ですが、新しくできた境南中央公園はもちろん防災訓練に使っていいと思いますが、最終的には緑化環境センターが公園管理しておりますのでそちらに確認させて頂きたいと思います。

そ

れから、コミセンごと、地域ごとに活動に差がある件について。

私はかつて、市民協働推進課長だったものですから、コミュニティ自主三原則を尊重して、行政があまり主導的にコミセンやコミュニティ活動について介入するのは控えたいという思いがあります。ということは逆に地域ごとにコミュニティセンターが中心になって防災ネットワークを基本とするところ、コミセン以外の自主防災組織が地域の核になるところ、避難所運営組織が中心になるところとか、それぞれの地域の特性によって違いがあつていいのかなと私は思っています。

ただし、その地域のコミュニティが防災という観点から紫陽花の花のようにまとまってほしい。紫陽花というのは、ひとつひとつの花びらが集まって全体としてひとつの花になっているじゃないですか。同じように、ひとつひとつの自主グループがいろんなグループがあってもいいけれど、地域の安全安心とか防災についてはどこが主導権をとるかとはともかくとして、地域

でよく話し合つてひとつの形あるものにしていくというのが必要でしょう。

コミセンが絶対ここを中心にしなくてはいけませんよとか、避難所運営組織が中心になるべきというふうに、画一的に進めるものではありません。それはよく地域の中で行政も含めてお話し合いをして整理をしていく必要があるかなというふうに思っています。

そ

れから災害時要援護者対策事業は健康福祉部の方で取り組んでいただいています。この事業の推進については健康福祉部と防災安全部が今、共同して推進会議を作つて課題の洗い出しをしています。

これもおそらく今、三澤部長がおっしゃった安否確認というのはある程度最低ラインかな、ミニマムのところかなと思うんです。それ以上に出来る地域もあるはずだし、そこまでやるのも大変だという地域も今あるんだと思います。

例えば、境南地域防災懇談会は先進的にいろんな新しいチャレンジをしていただいていますけども、それを見ながら他の地域が学んでいこうという動きもあります。現在、避難所運営組織は四つしかございませんが、今回の震災を機に第四小学校地域とか本宿小地域でもぜひ避難所運営組織を立ち上げたいというご相談が来ています。ですから境南町とか、本町とか、南町であるとか、先行している地域が新たな自主運営組織を作ろうという地域のサジェスチョンや協力、あるいは教訓を引き継いでいっていっしょに考えていくということも必要なんじゃないかなと思っています。

最

後に、子どもの安全安心、特にご兄弟がバラバラにならないようにというご意見がありましたけれども、恐らく学童クラブ単体で守りする、あるいはあそべ単体で守りするっていうのは、いろんな意味で限界があると思われます。

職員の体制の問題としてだけではなく、夜を徹してということもありますし、保護者の方との連絡という問題もありますので。保護者の方も、学校に連絡しなきゃいけない、学童クラブや保育園にも連絡しなくてはならないということだと、大変混乱すると思います。

ですので、たしかにご指摘のとおり、学童クラブやあそべえなどご兄弟も含めて、学校単位で一括して対応する仕組みが望ましいですね。保育園は保育園の園長が園舎で園児をきちっと守っていく。学校は学校の管理者である学校長が、学童クラブの児童であるなしにかかわらず、学校で守っていくっていうのが、基本的なスタンスになるのではないのでしょうか。

いずれにしても、今回の経験や教訓を基に、今後の地域防災計画の見直しにつなげていきたいと考えています。

健康福祉部部長

三澤 和宏さん

今

現在の仕組みの中で、足りない部分は当然あると思いますし、今回気づいたことも沢山あると思います。ぜひそ

こは、一緒にご相談しながら、前に進んで行かなくてはいいけないというのが基本的なスタンスです。

ただ一方で、きっちりこうじゃなきゃいけないと言っても無理な部分というのもあると思うんですね。

ご質問にあったように、コミセンごと、地域ごとによって取り組みの姿とか進み具合が違っているのも、実際あると思うんですけれども、そこらへんも、やれるところがやって行くという意味では、しょうがないのかなと思っています。

そ

れから、「安否確認事業」なのか、「災害時要援護者対策事業」なのかというお話もそうですね。

先ほどもちよっと申し上げた通り、最終的な目標は、やはり皆さんが発災後も安心して、避難所なりご自宅で過ごして頂けるということだと思うんです。で、特に私ども福祉のサイドでは、要支援者の方々にそういう風になっていただきたいというのが、もちろん目標です。

ただ、さっきも申し上げた通り、当初は避難誘導までと想定したわけですが、マニュアルでそこまではつきりお願いすることのハードルの高さがあるんじゃないかと思ったわけですね。

ですから、もちろん今「私はやります」っておっしゃっていただいたみたいに、やって頂ける所にはどんどんその先にも取り組んでいただきたいと思うわけですけれども、全体にそれを求めちゃうと、スタートで躓いてしまうところが結構出ちゃうんじゃないかと。なので、最初のステップ、第一歩としては、やっぱり安否確認でよろしいんじゃないかなと思います。

そうやってそれぞれの地域が、できることの範囲内で取り組んでいく。そしてお互いに刺激しあって、全体のレベルが上がって行くというものでいいんじゃないかと思っております。

もちろん、その最終目標は、発災後も安心して避難して生活を送って頂ける仕組みを全市につくっていくことにありますので、今、そのために何が必要か、もう一度庁内でチームを作ってシミュレーションをしています。

最

後に、先ほど申し上げた「支援者同士のネットワーク」ということについてですけれども、これは、きっちりした、なんとか事業とか、なんとか組織ということではなくて、皆さんのお話の中に出て来た、支援者の方同士が肩を叩いて、良かったねと声を掛け合ったという、その関係性のことが言いたかったんですね。

災害時要支援者対策事業は、支援者と要支援者の関係ですけれども、人と人のつながりというのはそれだけに留まるものじゃないと思うんです。

地域で気になる方という意味では、お隣さんだっけ気になるだろうし、お友達、お仲間もあるんじゃないか。で、そういうものってというのは、やはり色んな活動を通して作り上げられるものなんじゃないかなというふうに思ってたんです。

ですから、災害時のために支援対策事業のネットワークを作るといふよりも、福祉の会の日々の活動自体が、町の中のネットワークづくりにつながっているんじゃないかと。これがもつともっと深まって行くと、さらにこの地域が豊かになるんじゃないかなと、そういう思いでちょっと申し上げました。

武蔵野市吉祥寺南町コミュニティ協議会

小餅 友子さん

コ

ミセンのことでご質問があったんですけども、笹井さんもおっしゃったように、自主三原則のもとに各コミセンが運営されております。ですから、それぞれのコミセンがどういう方向性を打ち出していくかというのは、それぞれのコミセンの自主裁量に任されている部分が大きくて、その中で原さんの所は「弱者優先」ということだと思うんですね。

で、そのコミセン同士の横のつながりとして、コミ研連（コミュニティ研究連絡会）というものがあるんですけども、実はこの度、ほんとにタイミングよく、コミ研連のあり方を見直していこうという事で、プロジェクトチームが立ち上がったところなんです。先日第一回目の会合をやりまして、今年度は、やはりこういう時期なので、防災安全をテーマに行こうという事になりました。

この30日にまた二回目の会合がありますけれども、やっぱりこの震災を通じた様々な体験から、人間のつながりが大事だなというところをひしひしと感じていますので、当然そういう視点に立って、コミセンのあり方、重要性といったことが話し合われると思います。

研連の中でも、みんなで連携して、あらためてコミセンの役割を考えていくいいチャンスになっていると思いますので、今後の展開に少し期待していただきたいと思います。

参加者の感想

大変良い機会をいただきありがとうございます。

私は現在コミセンの委員長をしています。残念ながらうちのコミセンでは、運営委員の中に福祉の会に対する理解があまりなく、逆に邪魔扱いする人もいます。福祉の会が見えないのが原因だと思います。活動も少ないし、アピール力も弱いというのが実感です。

福祉の会がさらに活性化することを期待する一方、コミセンとして独自に防災・地震の時の居場所として今後進めていきたいと思っています。ただ、うちはあくまで窓口当番の為にスタッフに入っている人も多く、難しい部分もあるのが本音です。それでも、今日のお話を聞いて、福祉と協働で一步でも東・西・南町コミセンに近づきたいと思いました。

◆

コミセンの事例、災害状況、支援のまとめの資料は災害対応把握に参考になりました。

◆

時間が短く残念でしたが、活発なお話が聞けて今後地域での

話し合いに役立てていきたいです。ありがとうございました。

◆

緑町パークタウンの中でも震災当日についてのアンケートを行っているので、そのレポートもしていただきかったです。生命救助と個人情報天秤にかける話題が出なかった？

◆

大変興味深く聞きました。

関係ないことですが、震災以降自転車が増え危険を感じてます。市報などで注意を促して下さい。事故が増える前に。

◆

話を聞いて地域の力が少しずつ上がっていると嬉しく思いました。行政（職員）との協働の努力をすることで行政と市民の一層のレベルアップに期待します。

◆

コミセンがもっと防災に関心を持ってほしい。そのためには防災安全部はコミセンの会議にも出席して欲しい。自分の館の運営ばかりに目がいつているように思う。東町・南町のコミセンは特別（優秀な）なコミセンと思う。

◆ 所有あつて途中退席させていただきます。

(飯) 吉祥寺むさしのふるさと会というものを考えています。

(吉祥寺岩手会とか吉祥寺長崎会とか...) 今回の災害で関係のある地域には支援金等を出しやすいことを実感。地域コミュニティ力アップの仕掛けですが、東京が被災地になった場合は... という想定は3月11日以後頭に浮かびました。

◆ 3月11日は私の誕生日、先日急死した義父も3月11日、遺品から楽天の株を発見、同社のオーナー三木谷氏は十億寄付しましたが、仙台の楽天イーグルスのオーナーというだけでなくやはり3月11日生まれ。白鵬も3月11日、今からでも大相撲は東北に慰問旅行に行ったらよいですね。

◆ 震災の関係だけですが、もし東京に大地震が起きたら火災が発生すると思いますが、その対応は？とても心配です。

◆ 今回の震災についての報道(新聞・TV)を良く見た方だと思えます。気付いたことを1つお知らせしたい。身近な情報が全く欠け落ちていたこと。何週間も東京の被害は九段会館だけと思っていて、人と会ってのおしゃべりやら、口コミでいろんな被害を聞きました。口コミに頼ると風評被害は防げません。

◆ 全国版の報道はもちろん大事ですが、地域の、せめて東京版の報道、できれば武蔵野版の報道(公共のもの)があつたら信頼できたと感じました。TV局にも地域のニュースにも伝えてほしい。ともにケーブルテレビも発信してほしい。水の情報ハスポーツセンターのヨガの教室近くのコンビニの張り紙で安心と知りました。

◆ 皆さんの地域に対する熱い思いが伝わってきました。やはり一番大切なのはつながりですね。しかしそれから外れている一人暮らしの高齢者が沢山存在することも忘れないでほしい。

◆ 東北の被災地で避難をすすめても誘っても動かない人が多数いる。災害時要支援のシステムはもしかするとこの苦痛を支援者が背負う事になる。助け出す前に火災で逃げられないなどそうしたこと含めて市は市民に事業をおろしていることを認識して欲しい。(市民はそれでもやるのだから)

◆ 管理組合の理事をしていますのですが、管理組合の役割についてと市と福祉の会等々関係を考えていきたい。(安否確認のためのリストを含む)

避難所へ行きたい人なんて誰もいないと思います。避難所ではなくて自分の家で暮らせることが一番いいと思う。できるだけ自分の家で暮らせるようにする方向で市の大きな対策を考えてほしい。

武蔵野市に来て5年目。市と市民の連携、よりよい市、安心安全の市を目指していることがよく解りました。コミセンにも入りましたがコミセンの役割も大事なことがあることを知りました。

コミセンの役割の大きさを感じました。今回の災害で課題も具体的になってきているコミセンが多くあるのがうれしいと思いました。

協働サロンの存在意義が凝縮されたような今日の会だったと思います。武蔵野市民の存在意義も強くアピールされた力強さも感じさせてもらいました。

国債という美名にかくされた国の借金を行き詰まりと思い、

税金を使うことを極力減らしたいと思って日常活動を実践しています。

市の職員は市又は近隣に在住してほしいと思った。（採用の条件に）

日頃の地域住民のつながりが命をつなぐ、大きな成果をもたらすことがわかった。南町コミセンの対応に感動した。

地域社協の会合に市の福祉や防災の担当職員が定期的に参加して欲しい。地域の実態を肌で感じて対策を立てて欲しい。

福祉の会とコミセンの連携の大切さを知った。私の地域の今後のテーマにしたい。

災害時要援護者1名に対し、2名の支援者がついていますが、3月11日にはその2名とも吉祥寺には不在だったケースがあった。結局、近隣の人の声かけが大切だと思ったが、近隣に知られたくない人をどうするんだろうという疑問が残った。

市に対して物申したい人が多いことも分かった。政策が中途半端な課題が多いと思った。

市民レポーターのお話は貴重なものである。

◆
いろいろな地域の対応が生で聞けて大変良かった。

コミセンの意識の違いを知り、当地区のコミセンにも考え直してもらいたい所、多々であった。

◆
本町に住む独り住まい80歳。3月11日の地震の直後に隣、近所の若いお母さんが見舞ってくれ、ありがたかった。

◆
災害弱者の話が具体的にわかりやすかった。その点にスポットを当てて詳しく聞くだけでもあらゆる面で役立つと思う。

◆
当日夕方17～19時、約20軒の独居の女性宅を勝手に安否確認しました。皆さん喜んでくださいました。面識のない方にも声がけしたら、とてもほっとして下さった。

境南4丁目の女性のところに行ったらご自宅の前を通り過ぎる徒歩・帰宅者に道案内の張り紙をしたいとおっしゃる。(少し回り道になってしまう所でしたので)2人でカレンダーの裏に「小金井方面こちらへ」と大きく書いて西原踏切に貼りだし喜んでもらえました。

◆
他地域や市の動きがわかってよかった。

◆
①親戚が被災した。

②震災が続く時(お金があってもなくても)身体のケガが多くなると、救急の準備があるか、すぐ見てもらえる病院と建物のケアに困っている。(高齢者家族でなくとも)

③屋根瓦が落ちて隣の家の車のフロントガラスを破壊させて見舞金の額がはつきりしないので気まづくなってしまった。

④屋根瓦の修理は2カ月たっても材料、手間不足でやってもらえない。ビニールシートはかけてあるが、梅雨に入り、大雨の心配している。これもネットワークなどで修繕対策を考えておく事。災害保険のかけ方、業者の頼み方、早い修理を期待できるか。

◆
地球上の宇宙では、大きく衛星通信、ISS(国際宇宙ステーション)の通信網があったのに衛星通信の利用を大幅にやっただため、電話回線のパニックとなり、ほとんど電話が通じませんでした。そういう時こそアマチュア無線の周波数が役に立つのです。防災無線も結構ですけど、アマチュア無線の周波数を使用しなかったのでしょうか。

実行委員会から



学習会開催の経緯

本学習会は、武蔵野市と「NPO法人武蔵野市NPO・市民活動ネットワーク」による協働事業「協働推進のための市民学習会」の第1回目として開催された。その開催に至る経緯は以下の通りであった。

1. 「NPO・市民活動ネットワーク」は、平成19年9月から平成23年7月の間、武蔵野市からの委託により、NPO・市民活動の支援拠点「市民協働サロン」を運営してきた。同サロンでは、「活性化交流・勉強会事業」として、平成21年度、22年度の2年間、「まちをつくっているのは、私たち市民です」をテーマに、具体的な市民の活動を通して「つながり」や「きずな」を考える講座を実施した。それらの講座の実施に当たっては、「NPO・市民活動ネットワーク」の呼びかけによって集まった10名を超す市民による「実行委員会」が運営を担った。

2. 「市民協働サロン」は、平成23年にその機能が変更されたが、学習会事業は継続されることになり、引き続き実行委

員会メンバーによる内容の検討が行われた。

今年度は、地域で活動する団体と連携し、準備の段階から一緒に組み立てていくことなどが方向性として話し合われていたが、そのような最中に3月11日の大震災が起きた。

3. 実行委員の一人が、市民団体「地域福祉懇談会」の世話役をしており、4月の定例会で、災害時の情報交換を行った結果、市内各地で色々な動きがあったことを知った。自前で考え、相談し、行動する市民の自治の力に感動し、その体験を検証し、市民の共有のものとするために、早急に会を持てないかと考え、今年度の学習会事業の第1回として開催するよう提案した。

4. 実行委員会では、まちづくりを協働で推進するうえで、震災への対応は重要課題ととらえ、時間をあまり置かず学習会を開くことが大事だと決定した。

5. 行政、市民社協、市民が、平等な関係（相互に学びあう関係）で震災時に何をしたのか、何が課題であったのかを率直に出し合うことによって、新しい政策や解決の方向を、共に創りだす可能性が生まれると考えた。



実行委員の感想

◆
自治する市民が行政と共に学び合う場を持つことで協働がすすみ、武蔵野がよいまちになる。

◆
「協働推進のための市民学習会」で「大震災！そのとき武蔵野市民は…？」の学習会を実現できたことは、行政も横断的な参加になったこと、協働や自治の力の積み上げられた実態が、図らずも共有できたことなど、今後の協働の推進のために意味があるものとなったと思う。

◆
それぞれの地域が集い、話し合うことによって、多くの問題点に気づき、具体的解決に向けて行動する力になることを学ぶことができた。このような学びの場から「つながり」が生まれるのだと思う。地域がつながり、行政と「協働」していくためには拠点が必要なのだと思う。

◆
震災時、各地域でどのような動きがあったのか。それぞれの体験を具体的に聞いたことは、非常に刺激的であった。これをきっかけに防災、まちづくり、福祉、子ども…どの分野におい

ても見直しと再構築が、市民と行政、市民団体等の協働によって行われて欲しいと思う。

◆
震災時の市民の行動力と存在感に圧倒された。地域福祉の会やコミセンの今回の対応は、まさにそこに関わる市民が自ら公的な立場であるとの自覚に基づいた動きであり、自治する市民の姿だと感じた。

◆
このような横断的な集まりが、度々開かれ、課長や現場に近い職員が問題提起するようになれば、協働は一層本物になると期待できる。それぞれが独自の活動をする 것과同時に、必要ときには重なって、協働の活動を展開することが必要だし、実際に行われていることが今回の学習会で確認された。

◆
行政に対して望むのは、一つは縦割り意識を出来るだけ薄めること。また、「地域担当」職員を置くことが語られ始めているが、真剣に検討する時期に来ていると感じた。

◆
今回の学習会は「市民協働サロン」の場と機能が結集されたから出来た企画であり、また、2年間にわたる度重なる話し合いで生まれた「連続学習会」の成果ともいえる。



気づいたこと

1. 企画団体、協働サロンスタッフ、実行委員会は協力しあつて短期間に準備を行い、市民学習会を成功させることができた。行政の参加・対応も時宜に適ったものだった。
2. 市民レポーターや当日の参加者の方に「武蔵野市NPO・市民活動ネットワーク」の存在や役割があまり知られていないようで、打ち合わせのときに、実行委員が「あなたは誰？」と聞かれたというエピソードもあった。
3. 市民グループは、地域で活動し、現場にいるからこそ問題意識、課題の発見、タイミングをすくい上げるなどの面で利点があり、地域の切実・緊急な課題に取り組むことができる。一方その反面で、全市規模の宣伝、行政とのつなぎ、会場の設定、記録の作成などにはなかなか手が回りきらないのが実情。
地域・団体にとって必要な支援をすることのできる「中間支援組織」の在り方を今回提案できたと考えている。
4. 参加者95名のなかに、市役所・市民社協等の職員12名の参加があった。また市議会議員、教育関係者の参加も多数あったことは、画期的なことだった。



協働と学びについて

1. 横浜市の市民と行政のための協働ハンドブックでは、「市民と行政とが、お互いに良いところを持ち寄って、一緒に住みよい街をつくっていきましょうというのが協働です。」と非常に分かりやすく書かれている。
2. 基本的な理解と合意を作るためには、オープンな場での市民と職員のコミュニケーションと、合意形成に至る過程が大切。共に振り返り、軌道修正する柔軟さが信頼を深め、相互理解が進んでいく。
3. 今回の学習会ではそれぞれの地域の防災やまちづくり、人のつながりなど、色々な体験や気付きが語られた。また、行政からも震災当日の動きや情報の出し方などが語られ、この会が「協働について共に学ぶ」「オープンな議論を行う」場となり、互いの信頼関係深めることにもなった。
4. このような学びを通じたつながりを重ねることで、新しい「公共」を生み出す可能性も出てきた。また、「学習」は協働を推進する上での、重要な「方法」のひとつになることが確認された。市民が協働を推進する上で必要な学習の場を、自らが作り出すことができるとの気付きがあった。

検証レポート

大震災！そのとき武蔵野市民は…？

3・11 東日本大震災、どんな対応が市内で出来たのでしょうか？

この体験を共有し、今後はどう生かせるかを考えましょう。

行政・市民社協・市民などそれぞれの立場から、課題は何かを探り、解決の方向を探しましょう。フロアからの発言も歓迎します。

市民レポーター

吉岡諒子さん（南町）

大屋朋代さん（本町）

原 利子さん（東町）

岩崎みどりさん（災害弱者とその周辺）

行政より 防災安全部 笹井部長 ・ 健康福祉部 三澤部長

日時： 平成 23 年 5 月 27 日（金）13 時 30 分～16 時

場所： 武蔵野市役所 東棟 601 会議室

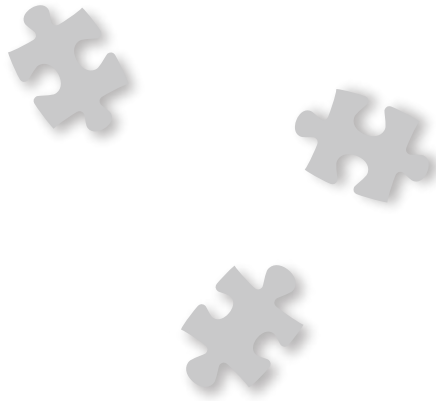
費用： 無料 当日直接会場へお越しください

運営責任：特定非営利活動法人 武蔵野市NPO・市民活動ネットワーク

企画協力：地域福祉懇談会

* 関連企画：5 月 28 日（土）13：30～15:30 サロンカフェにて被災地支援報告会
「いま被災地に必要なこと・私たちができることを聞いてみませんか」を行います。

問合せ先：市民協働サロン：TEL 0422-60-1939



平成 23 年度 武蔵野市協働推進事業
協働推進のための市民学習会

検証レポート

大震災！その時市民は…？

発行日	2011 年 9 月 1 日
発行	武蔵野市企画政策室市民協働推進課 〒180-8777 武蔵野市緑町 2-2-28 武蔵野市役所西棟 7 階 電話 0422-60-1830 E-mail sec-kyoudou@city.musashino.lg.jp
編集・制作	武蔵野市NPO・市民活動ネットワーク・ 「協働推進のための市民学習会」実行委員会
企画協力	地域福祉懇談会